

季刊マーメイド

逗子市立図書館報
第19号
2018年2月1日発行
逗子市立図書館
逗子市逗子4-2-10
046(871)5998
<https://www.library.city.zushi.lg.jp>

小坪のむかし

小坪のむかしをたどる

2月、寒風吹く港に並べられ、干されているワカメは、冬の小坪の風物詩です。さつとゆでると鮮やかな緑になり、その肉厚の歯ごたえと旨みは、一度食べると忘れられません。そんな豊かな海の幸を育む小坪は、逗子市の西側、鎌倉市と逗子湾の境に位置しています。漁業で逗子の食を支える一方、海と遊びリゾート拠点でもあります。小坪の歴史は古く、披露山一帯の丘陵にはいくつかの遺跡があり、出土した土器片から、縄文時代早期から人々の生活拠点があったことをうかがい知ることができます。そして、海との密接な関わり的な

かでの歴史を紡いできました。今回はそんな小坪のむかしをたどります。

近代まで小坪は現在の小坪地区と新宿地区を含む地域を指していました。磯がちの海である鷺ヶ浦（小坪浜）を擁する集落を西小坪、平坦な砂浜海岸の田越浦（逗子海岸）に面した現在の新宿・披露地域を東小坪と呼び、単に小坪と呼ぶ場合は西小坪を指していました。新宿という字名は、昭和18年に正式に定められています。

小坪という地名の由来には、源頼朝が三浦遊覧した折にこの地で茶壺を献上し、頼朝が喜び披露したことから披露坂、小坪（壺）村と名付けられたという説（『三浦

『古尋録』や、『小局』という言葉で
朝廷をはばかりて語尾を切り「こ
つぼ」とした説『逗子町誌』など
がありますが、詳細は不明です。

鎌倉の発展とともに

小坪の名は約800年前の記録
『平家物語』源平盛衰記『吾妻鏡』

から見ることででき、小坪・小壺・
小窪という字が当てられています。

『吾妻鏡』では、頼朝が寵愛する
妾の亀の前を小坪（小窪と記録）の
小中太光家宅に住ませたことが
書かれ、その地を「御浜出になるに
も便利な地」と記しています。

亀の前はその後飯島に移ります
が、正妻である北条政子の嫉妬を
買い、家を破壊され、辛うじて鑑摺

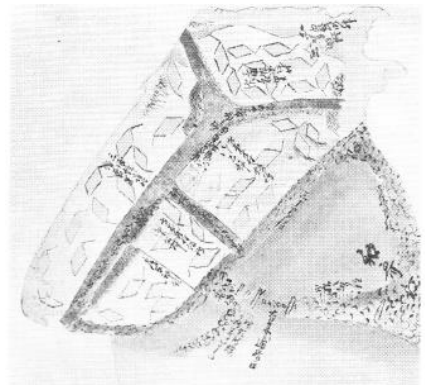
の大多和五郎義久宅に逃れます。

しかし、なお頼朝の寵愛が深く、北
条政子を恐れながらも、亀の前は
また小坪に戻されたそうです。

その後も『吾妻鏡』では、頼朝の
小坪浜での遊宴や、その息子頼家
の小坪（小壺と表記）の浜の遊覧の
記録が残っています。

鎌倉幕府に近く、豊かな浜を擁
する静かな集落だった小坪は、頼
朝にとってひとときのくつろぎの
場であったのかもしれない。記
録の中で、こうしたエピソードは、
人間頼朝像への想像をふくらませ
てくれます。

貞永元年（1232）7月、和賀
江島の築港が始まりました。この
和賀江島ができたことで、小坪は
大きく変わります。



江戸時代の和賀江島（草柳博家文書）
『相州小坪浦漁業史』より

和賀江島の開港により、首都で
ある鎌倉には、海路で多くの人々
が来るようになり、その中に、紀
州・伊勢の人もいました。彼らは小
坪にも多く移住し、志摩の漁業技
術と、伊勢商人の才を土地に伝え
ながら働きます。小坪の豊かな海
の幸は、鎌倉の食を支えることと
なりました。小坪には伊勢・志摩に

関わりのある地名が多いこと、今も伝わる祭神や漁業技術があることなどから、その関連をうかがい知ることができます。

小坪は鎌倉とのつながりが深く、「小坪郷分帳」(1362)でも鎌倉郡と記されています。さらに円覚寺領となった後、時期は不明ですが、三浦半島が小田原北条氏の支配下に入った頃の文書「小田原衆所領役帳」(1559)では、小坪が三浦郡に属していたことが確認できます。

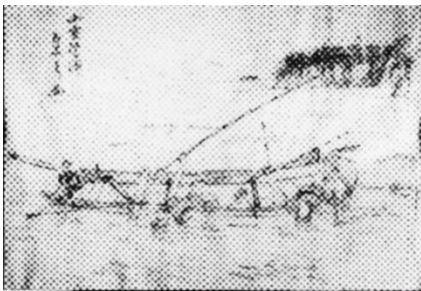
漁業で支える暮らし

徳川家康が関東を支配すると、小坪村をはじめ三浦半島全体が徳川幕府の直轄地である天領となり

ました。このことで村は厳しい貢租負担を受けます。さらに三崎往還・浦賀往還の継立場として両往還への御伝馬御用、鎌倉八幡宮御役、日光例幣使御用などの使役もかかり、経済的に苦しむこととなりました。山がちで耕作地が少ない小坪では、主な収入源は漁業頼みでしたが、そのためか漁場の争いの記録が多く見られます。伊豆方面への鰹漁では伊豆諸島の鰹船と、また秋谷浦の丸木船漁では秋谷村と、互いの取り分を守るための協定が図られました。

小坪では、多様な魚種に合わせ、様々な漁法を組み合わせた小規模漁業が営まれていました。特に小坪浜先は、階段状に徐々に深くなる地形で、棚の多い磯は海藻や魚

貝の繁殖に向き、その稚魚を求める魚もやってきました。丸木船から、ヒシ(菱)を使って突き取る見突き漁(ぼうちよう)は小坪浜の主な漁法です。海底を覗きながら船を扱い、魚介類を取るには相当の経験が必要でした。明治期以降に箱型の「かがみ」と呼ばれるガラス眼鏡ができてからは、より海中を見やすくなりましたが、かがみの



小坪鷺浦でのボウチヨウ魚の図『逗子市文化財調査報告書 第15集』より



小坪浜の海底図 『鷺の浦風土記』より

残っています。ぼらも江戸期には献上魚でした。わかめは昭和に入ってから人気が出た海産物ですが、海松は、毎年11月23日の新嘗祭に、今も宮中へ献上されています。

棧を歯でくわえるため、見突き漁は「目と歯がよくないとできない」といわれたそうです。小坪浜のよい漁場は「ナカゼ」「コカブネ」など名付けられており、海はまさに生活に密着した場でした。

四季折々の海産物は『鷺の浦歳時記』に記されていますが、その豊かさに驚くばかりです。あわび、さざえ、かまくらえび(伊勢えび)は、昔から小坪の漁師の生活を支えてきました。また、江戸時代には幕府が祝宴用の鯛を大量に必要としたため、生鯛の納入ルートを確保していました。小坪もその供給元だったことが記録に残っています。ぼらも江戸期には献上魚でした。

参考資料

- 『鷺の浦風土記』 P 291.3 イ
- 『鷺の浦史話』 P 213.7 イ
- 『鷺の浦歳時記』 P 386 イ
- 以上 石井清司著
- 『逗子市文化財調査報告書 第4集—小坪・新宿—』『逗子市文化財調査報告書 第15集—小坪の漁労具—』逗子市教育委員会編・刊 D 709ズ
- 『逗子市誌 第4集—文献にあらわれた逗子—』逗子市教育委員会研究調査部編 逗子市 P 213.7 4-1
- 『逗子市史 資料編—古代・中世・近世—』逗子市 213.7ズ
- 『相州小坪浦漁業史』辻井善彌著 菊池邦彦著 P 662ツ
- 『校訂三浦古尋録』横須賀市立図書館 Z 29.Bコ
- 『逗子町誌 改訂』改訂逗子町誌刊行会編・刊 P 213.7ズ